

# 鳥飼行博さん

(東海大学教養学部教授)

## 経済学から環境・貧困・戦争を見る

環境問題は「感情」だけではなく「勘定」からも考える——これが環境経済学者・鳥飼さんの持論だ。貧しい途上国の「意図せざる環境保全」、豊かな日本の「意図せざる環境悪化」から見えてくる持続可能な開発とは。

貧しいからこそ心がける環境保全

——専門は「環境経済学」と伺いましたが、門外漢から見ると経済学と環境問題はずいぶん畑違いで、相反する関係にあるようにも思えます。どんな経緯で二つの分野を手がけるようになったのですか？

もともと私は茨城県の水戸の出身なんですけど、子どもの頃から虫が大好きで、朝の四時、五時に起きて虫獲りに出かけて、それから学校へ行くような少年でした。友だちと千波湖<sup>せんぱこ</sup>で釣りをしたり、あちこち自転車

で走り回ったり、身近にある豊かな自然の中で遊びながら育ったんです。もうひとつ好きだったのが、歴史や社会の領域で、古代文明から始まって産業革命を経て現代へと至る、世界の文明のダイナミックな流れにもすごく関心がありました。結局、その流れをグローバルな視点から見るとは経済学がいいだろうと、大学では経済学を専攻することにしたんです。

卒業論文では、開発途上国の累積債務問題をテーマに取り上げましたが、その中で工業化と資本形成を進めれば債務は返済できるけれども、返済ばかり考えると自然が失われることになりかねない、というような

指摘もしています。木材を輸出し森林が減少すれば、いままでいた野生種もいなくなる。当時の私は子ども時代の体験から、経済成長が進むと環境が破壊されると直感的に思っていたようです(笑)。

——その後は大学院に進んで、アジア・中南米の地域コミュニティのフィールドワークを通して、途上国の開発の問題を取り上げていくわけですね。

最初に本格的な調査をしたのは、フィリピンの米作



●とりかい・ゆきひろ 一九五九年茨城県生まれ。東京大学大学院経済学研究科修士、経済学博士。東海大学教養学部人間環境学科教授。研究テーマは、開発途上国における持続可能な開発や環境問題の国際協力、地球温暖化など。主な著書に『開発と環境の経済学』『地域コミュニティの環境経済学』『写真ホスターから学ぶ戦争の百年』など。

農村です。初めのうちはフィリピン人の運転手を手配してもらって、車で出かけました。運転手が調査の通訳もしてくれるんですが、「その質問はさっき聞いただろう」とか言い出して、自分で先に答えてしまう。「いや、俺はあんたじゃなくて、この人の意見を聞きたいんだ」と言い合いになったり(笑)。やっぱり他人に頼って仲介してもらっているからいけないんだよなと気づいて、それからは一人で農村を訪問したり滞在したりして調査するようになりました。

いきなり聞き込み調査をやったら失礼ですし、警戒もされますから、最初のうちは歩き回って話をしたり写真を撮るだけだったり、泊めてくれた家に写真をプリントして送ってあげたりして、少しずつコミュニケーションを深めていきます。そうするうちに見えてきたのが、のちに私が「意図せざる環境保全」と呼ぶようになる、途上国の農村社会のあり方でした。

フィリピンでもメキシコでも、貧しい人たちはもともとと環境のことなんて、あまり意識していません。お金がないから車にも乗らないし、電気があっても電気がもったいないからすぐに消してしまふ。そういう貧しさから生まれた節約や省エネの意識が、結果的に